日本一と言える「生路の三白（さんぱく）」

生路に日本一があった？ それも三白とは何のこと？
三白とは三つの白ということですが ①生道塩 ②白砂糖 ③白木綿の三つのことです。白木綿はよく知られていますが、生道塩は少々、でも白砂糖についてはほとんど知られていません。
実は生路の三つの「白」はいずれも日本一と言えるものだったのです。

塩を神様としてお祭りする伊久智神社

① 延喜式に登場する「生道塩」

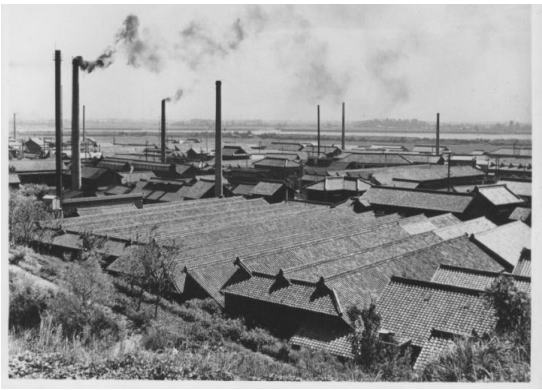
平安時代の延喜式という書物に「生道塩」というものが記されています。それによると、生道塩はワカメなどとともに教王護国寺の諸尊の供養にあてるものとして、尾張の国から貢納されたもの。延喜式に記されている塩に、淡路塩、紀伊塩のように地名のついているものがある。それらからすると生道はやはり地名で、尾張の国で生道と言うのは東浦の生路しかなく、生道塩の生道は生路を意味するとされています。つまり、生路の塩は平安時代から全国に知られる存在でした。

② 初めて白砂糖をつくった原田喜左衛門…将軍家へ献上

安永4年(1775)に名古屋の医師が書いた「安永本邦萬姓司記」や、おなじころ内藤東甫が著した「張州雑誌」に生路村の砂糖のことが記されています。当時の日本では、享保年間に将軍吉宗が琉球からサトウキビの種を取り寄せることを命じたことに始まり、薩摩をはじめ九州地方では黒砂糖が作られていました。でも、白砂糖は中国から輸入していました。

尾張藩の儒者松平君山が砂糖の製法を学び、3人に伝授し、その中の原田喜左衛門は白砂糖造りに成功しました。原田家の白砂糖は舶来品にもまさる上品で、宝暦7年(1757)「三盆砂糖」の名をつけて、杉の曲げ物に詰めさらに桐箱に納めて、尾張徳川家から将軍家へ献上されました。

神後院にある原田喜左衛門の墓


昭和13年頃の生路

③ 東浦を支えた綿織物業

今は東浦に4軒しかない織物工場、東浦の一時代を支えたと言っても過言ではありません。中でも生路はその中心で都市銀行の東海銀行が昭和25年8月7日～昭和44年9月8日まで営業していました。知多木綿は岡田が発祥の地で、後に半島の東側がより盛んになり、東浦がその中心でした。昭和30年代までは活気にあふれ、知多、松坂、泉州が日本の三大織物生産地と言われました。

昭和32年の従業員は5.721名で、職種の特性から女性が7～8割を占め、若い従業員対策として学校もつくられました。

東浦ふるさとガイド協会は東浦の歴史や文化をPRするボランティア団体

【ガイド・ふるさと散歩のお申込みお問い合わせ先】 東浦町郷土資料館うのはな館
☎ 0562－82－1188 住所:東浦町石浜桜見台18－4
＜詳しくは「東浦ふるさとガイド協会」のホームページをご覧ください。＞